雪の音

UN・Scarlet

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰も悪くなんてない…ただ、間が悪かっただけなんだよ

目次

主人公Profile ―― 1
本編
episode 1 ―― 5
episode 2 ―― 9
episode 3 ―― 18
episode 4 ―― 25
episode 5 ―― 32
episode 6 ―― 40

主人公Ｐｒｏｆｉｌｅ

藤宮（ふじみや）　翔一（しょういち）

誕生日　９月２７日

星座　天秤座

年齢　１９歳

血液型　Ａ型

身長　１８２㎝

体重　６７kg

好きなもの　甘いものと辛いもの

嫌いなもの　きのこ類

性格　自分より先に相手の心配を出来る優しい性格。

高校生までは何処にでも居る１６歳の子供であったが。家族で旅行中にノイズに襲われ１人生き残る。

その後弦十郎に保護されるも。精神が不安定な為、約１年の間病院で生活する事になる

精神が安定してからは学校に復帰、無事卒業。
卒業後親代わりの弦十郎に連絡を取り特異災害対策機動部二課に所属。
その時、初めてシンフォギアの存在を知る。
特異災害対策機動部二課に所属してからは弦十郎、緒川を師事し心身共に鍛錬し緒川のサポートに着くことになる。
ここまでが原作開始の2年前である。
原作開始迄の2年間は翼、奏のサポートに回る事になる。
翼、奏とは良い友好関係を築けていた。特に奏は境遇が一緒な事からメンタルケアに尽力を尽くした為仲が良かった。
ライブ事件当日は緒川の代わりに飛び回っていた為不在。
帰還してから奏の死を知り深く悲しむ。翼が壊れてしまわぬ様に悲しみを押し殺し、支える事を決意。そのおかげで翼は精神崩壊は起こさずに済む。剣にはなってしまったが。
響がガングニールを纏って戦う様になってからは、翼と響の仲を取り持つ為に苦労する。
苦労したおかげか、翼は響を認める様になり共に戦う事を決意する。
この時にはもう奏者のサポート役として、特異災害対策機動部二課のメンバーに認識

されている。弦十郎にもそう言われている。
その後も翼、響のサポートをしつつ、時には緒川のサポートにも回るといった激務をこなす。
クリスとの出会いは翼が絶唱を歌い倒れた時に、弦十郎に言われて追いかけた時である。
ＯＴＯＮＡに片足どころか半身浸かりつつある翔一から逃げる事は叶わず、クリスは呆気なく捕まるが。翔一はクリスもまた心に闇を抱えてる事に気付き、どうするか迷ってる最中に隙を突かれて逃げられる。
２回目の出会いは夜の公園で子供が迷子になっている時だった。
成り行きで子供の親探しに付き合う事になり、そこで本心では歌が好きなことを知る。
何も聞いてこないのかと聞かれたりもしたが、伊達に奏や翼、響の悩みを聞いて解決していた翔一は、敢えて何も聞かずにクリスが自分で話してくれるのを信じる事にする。
その後もクリスと接触し、徐々にクリスとの距離を縮めていく事に成功する。
フィーネに裏切られ、ＯＴＯＮＡとは何たるかを弦十郎に教えてもらい此方側の仲間になったクリス。

この頃からクリスは翔一の事が気になりはじめていた。クリス自身は否定していたが。

翔一自身はまだ守るべき対象としてこの時は見ていなかったが付き合うきっかけは突然訪れる。

最終決戦時、カ・ディンギルの一撃を防ぐ為絶唱を歌い、全てを賭けて守りきり落ちていったクリスを見た翔一は初めてそこでクリスの事が好きだったのだと気づく。

だがクリスはもういない、そう思うと同時に涙が溢れて止まらなかった。だが、未来やその友達、響が助けた子供達の応援で復活。エクスドライブに覚醒してフィーネを撃破する事に成功。

その後、ルナアタック事変が終わり、落ち着いた時期に翔一はクリスを街に連れ出し告白。これにクリスは承諾し恋人関係となる。

本編

ｅｐｉｓｏｄｅ　１

ピッ…ピッ…ピッ…

電子音だけが鳴る静かな部屋の中少女は呟く。

「どうしてあの時アタシを庇ったんだよ…なぁ？答えてくれよ翔一」

その質問に答える人は、居ない……

◇◇◇

１ヶ月前

突然だが俺の自己紹介をしよう。

藤宮（ふじみや）　翔一（しょういち）

歳は１９で訳あって特異災害対策機動部二課、もといＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇに所属している一般人である。

そして雪音クリスと恋人同士でもある。

まぁ俺の自己紹介は置いておいて、今日はクリスとのデートがあるんだ！全く、楽しみだぜチクショウ！

◇◇◇

S．O．N．G．本部内

「よし、今日のお仕事終了っと」

「あら。今日は随分と早いじゃない、何かあるの？」

「ああ、友里さんか。今日はクリスとデートなんで速攻片付けたんですよ」

「成る程ね。いつもそのくらい頑張ってくれると嬉しいんだけどね」

「あっはは…すんません、以後気を付けます」

「冗談よ。それよりいっぱい楽しんできてね。呉々もクリスちゃんを傷つけちゃダメよ？」

「分かってますって！兎に角、時間が勿体無いんで俺もう行きますね！お疲れ様でした――！」

「ふふ、お疲れ様」

◇◇◇

リディアン音楽院前

「はぁ…幾らクリスを待つと言っても、女子校の前で待ち続けるのは辛いもんがあるぞ」

下校して行く女子校生にチラチラ見られながら待つ事約１０分

「よっ！待ったか？」

「あぁ、通報されるかと思ってヒヤヒヤしてたよ」

「プッ…なんだそれ」

「何でもないよ、取り敢えずお疲れ様。クリス」

「ありがと。翔一もお疲れ様」

「おう。クリスの為に速攻終わらせたんだから感謝しろよ？」

「そっか、じゃあ今日はアタシがリードしてやるよ」

「楽しみにしてる。じゃあ行こうか」

それから色んな所を回った。

デパートで買い物したり、カラオケにも行った。カラオケでは俺もヤケになって勝負を挑んだが流石シンフォギア奏者。歌が尋常じゃなく上手くて惨敗だった。

その後は立花や小日向達がよく行ってるらしいお好み焼き屋ふらわーにも連れて行ってもらった。あのお好み焼きはまた食べに行きたい、そう思ったほど絶品だった。

まだまだ色んな所に行ったが、兎に角楽しい時間をクリスと一緒に過ごせた。

「あー楽しかった！」
　そう言いクリスは俺に向かって満面の笑みを浮かべた
「ああ、俺も凄い楽しかったよ。また今度もこうやって遊ぼうな」
「あったりめーだろ！なんたってア、アタシの彼氏なんだし…」
「ははっ、そうだな。付き合ってるんだから当たり前だよな」
「そうだぜ！　　ツクシュン」
「ん、そろそろ冷えてくるだろうし帰ろうか」
　そのまま俺は返事を聞かずにクリスの手を握り帰路に就く
「あっ…」
「ん？なんか言ったか？」
「な、なんでもねーよ」
「そんなに顔赤くして言われても説得力ないぞクリス？」
「う、うるせぇ！黙ってエスコートしやがれ！」
「はいはい。それじゃ帰りますよお姫様」
　この時あの道を通らずに帰ればあんな事にならずに済んだのかも知れない……
　そう…思わずには居られない……

ｅｐｉｓｏｄｅ　２

俺達の幸せを奪う事件は余りにも呆気なく訪れた。
「クリス。寒くないか？」
「ん、大丈夫だぜ」
「そっか。もう少しで家に着くし何かあったらなんでも言えよ？」
ピピピピッ！ピピピピッ！
２人の携帯に通信が入る。画面には風鳴弦十郎の文字
「もしもし、翔一です」
「藤宮君か！ノイズが出現した！」
「ッ！マジかよ」
「おっさん！何処に出たんだ!?アタシが行くから場所を教えてくれ！」
「クリス君か、分かった。今座標を送らせるから直ちに急行してくれ。無茶はするなよ」
「分かってるって！アタシに任せとけ！」
「翔一君は避難誘導と取り残された人達の救出を頼む。直ぐに響君と翼を向かわせる」
「りょーかいっす！」

「頼んだぞ」

「よし、そんじゃちゃっちゃと終わらせて帰ろうぜ翔一！」
「クリス」
「なんだよ？」
「無茶だけはしないでくれ。心配なんだ」
「つんだよ？アタシが信用できないって言うのか？」
「違う！そうじゃないんだ。ただ胸騒ぎがして不安なんだ…」
「分かった…翔一の感は結構当たるからな。」
「ありがとう。それじゃ又後でな！」

◇◇◇

クリスがイチイバルを纏い現場に着いた頃俺は避難し遅れた人を誘導していた。
「落ち着いて下さい！シェルターはこの先にあります！」
粗方避難し終わり俺も退却しようかと思ったが。遠くから微かに子供の声が聞こえ
…その瞬間俺は走り出していた

「おーい！何処に居るんだー！返事をしてくれー！」
「くそッ！一体何処に居るんだ!?」
　ガラッ…
「ッ!?」
　振り返ったそこには
「痛いよ…ママ…パパ。何処に居るの？」
「良かった…お嬢ちゃん、此処は危ないから避難しよう」
「うん…パパとママは？」
「大丈夫、シェルターに避難してる筈だよ。さ、行こう」
　ピョコッピョコッ
「おいおい…嘘だろ？」
　居るはずのないノイズの大群がそこには居た。
「まずいな…逃げるぞお嬢ちゃん!!」
　子供を抱きかかえ走り出す翔一。それに気づき追いかけてくるノイズ
　援軍などに期待は出来ない。翔一のデスレースが今始まった
「クッソ！しつこい奴らだ！」
「お兄ちゃん…私達死んじゃうの？」

「はぁ…はぁ…絶対に死なない！死なせるもんか！」
幾ら男であろうとも子供を抱きかかえ走り続ければいつかは限界がくる。
現に今翔一は限界を迎えそうになっていた…
「はぁ…はぁ…はぁ…」
ーーマズイぞ…これ以上は俺が持たない。一旦何処かに隠れてやり過ごさないとッ！ーー
翔一は目の前にあったビルに滑り込む。だが此処で神に見放されたのか、ビルに入り潜り込んだ所は床が抜けていた。
「なっ!?」
「嫌ぁぁぁぁ!!?」
「大丈夫！俺がなんとしてでも守るからッ！」
2階ほどの高さから落ち背中を強打する翔一。更に運が悪い事に、飛び出ていた鉄筋によって着地した時に左腕が大きく切れてしまった。
「ガッハァ！」
「グッ…はぁ…はぁ…チクショウ」
「絶対に死んでたまるか…ッ！大、丈夫か?…お嬢ちゃん」
「う、うん…お兄ちゃん。腕が」

「大丈夫…ッ　兎に角早く移動しないと又見つかっちまう。行こう」

◇◇◇

時間は少し戻りクリスはと言うと。

「オラオラオラァッ！アタシと翔一の時間を邪魔したんだ！吹っ飛んじまえ!!」

ご覧の通り大荒れである。

「クリスちゃん…すっごい荒れてるね」

「ああ、私達も見てるだけでは行かないぞ立花」

「そうですね翼さん！行くぞー！」

１０分もしないうちに殲滅し終えたクリス達はＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．に連絡をすると、とんでもない事態が起きてることを知る

「おっさん、ノイズの殲滅終わったぞ」

「大変だクリス君!!」

「な、なんだよいきなり？」

「藤宮君がノイズに襲われている!!」

「なんだと!?どう言うことだおっさん！」

「詳細は追って話す！現場に急行してくれ！」

「チッ！くそッ待ってろよ翔一ッ！」

「あっ！クリスちゃん!!」
「私達もこうしては居られん！行くぞ立花！」

◇◇◇
廃ビル内
「はぁ…ッ！くそったれ…左腕が動かねぇ」
「お兄ちゃん…大丈夫？」
「あ、ああ…大丈夫だよ。今助けが向かって来てるからもう少し我慢してな？」
「うん！」
ーーそうだ…なんとしてでも生きるんだ。生きるのを諦めちゃダメだーー
ピョコッピョコッピョコッ
「ッ!?しーっ」
ピョコッピョコッピョコッピョコッ
1秒が何分何時間にも感じる恐怖の中、翔一の精神はドンドンと磨り減っていく…
◇◇◇
その時全速力で駆け付けたクリス、響、翼の3人が到着した。
「アタシの翔一を返しやがれッ！」

ガチャコンッ！
「ダメだよクリスちゃん！今此処で撃ったらビルが崩れちゃう！」
「チッ！じゃあどうしろって言うんだよ！」
「私と立花がノイズを引き受ける！雪音は藤宮さんを探しに行け！くれぐれもミサイルを撃ったりするなよ？」
「ああ、悪い！頼んだ！」
「翔一！何処だ翔一――！」
「邪魔なんだよッ！そこを退け！ノイズどもッ！」
迫り来るノイズを蹴散らしながらクリスは翔一を探す…
◇◇◇
「……？ノイズが減ってる？それにこの銃撃音は…そうか」
「来てくれたんだな…クリス」
「お兄ちゃん？どうしたの？」
「ん、助けが来たみたいだ。ノイズも居ないし今の内に移動しよう」
翔一と子供は落下した所に向かって歩き出した
「はぁ…はぁ…もう少し、もう少しで助かるからな」
「うん…」

「翔一ッ！」
「クリス…ありがとう」
「良かった…ってその傷ッ！大丈夫か!?」
「ああ、俺は大丈夫だから…先にこの子供を頼む」
「分かったっ！直ぐに戻るから少しだけ我慢しててくれ！」
そう言いクリスは子供を抱いて響たちのもとえ向かった。
見送った後翔一は柱に背中を預け座り込む。
「くそッ…結局俺は何にも出来やしねぇ…グッ！」
「頭が…痛え…俺此処で死んじまうのかな…?もう手足の感覚がねえや」
「翔一！」
「ああ?クリスか…何処に居るんだ?」
「な、何言ってんだよ！目の前に居るじゃねーか！」
「ん、そっか。ごめんな、目が…見えなくてよ」
「お、おい！死ぬんじゃねーぞ!?大丈夫だよ！今アタシが助けてやるから！」
クリスは直ぐに翔一を傷つかないよう立ち上がらせると肩を貸しながら歩き出す
だが、此処に来てビルが崩壊を始める。ノイズとの戦闘によりビルが持たなかったのだろう。

崩壊が進む中、一生懸命逃げる２人だが残酷な運命は２人を見逃さなかった。
入り口に差し掛かった時、上から瓦礫が降って来たのだ。
「クリスちゃん！危ない！」
「避けろ雪音ッ！」
「え？」
その声を聞いた翔一は動かなかった筈の左腕までも動かしクリスを庇い瓦礫に吹き飛ばされる
「翔一ーーーーーーーッ!!!」
「なんでだよ…なんでアタシなんか庇ったんだよ…翔一……」
「そりゃ…男が女…を守るのはッ！…当たり…前だろ？ガハッ！」
ビチャビチャ！そう言えるほど血を吐きながらも答える翔一
「ッ！待ってろよ翔一！絶対に助けてやるからな!!死ぬんじゃねーぞ！死んだら許さねーからな！」
「あ…あ……頼…む」

この後直ぐにＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．のＯＴＯＮＡでもありＮＩＮＪＡでもある緒川によって速やかにＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．管轄の病院に運ばれる事になる

episode 3

某S．O．N．G．直轄病院内

「なにやってんの！」「輸血パック早く！」「血圧低下！危険域までもう余裕がありません！」

慌ただしく集中治療室に運び込まれる中、翔一は朧げな意識の中考える。

ーー死にたくねぇ……まだ、まだクリスと話していたい。もっと色んな所をまわってーー

その先を考える前に翔一の意識は途絶える

◇◇◇

集中治療室前

クリスは只々祈り続けていた

「お願いだ…頼むからもうアタシの大切な人を奪わないでくれ…」

ーーアタシはどうなってもいい。だから翔一だけはッ！ーー

「クリスちゃん…」

「大丈夫だよクリスちゃん！藤宮さんならきっとへいき、へっちゃらだよ！」

「ああ、藤宮さんはああ見えて丈夫だからな。大丈夫だろう」
「そうですね、僕の元で稽古していた時期もありますし。藤宮さんなら大丈夫ですよ。だからクリスさん、貴女が大好きな藤宮さんを信じてあげましょう」
　ＮＩＮＪＡが話し終わったちょうどその時、集中治療室から担当医師が出てくる
「お、おい！翔一は大丈夫なのか!?」
「はい、何とか一命は取り留めました。ですが依然として危険な状態には変わりありません」
「先ず左腕の大きな裂傷から細菌が入り込み高熱が出ている状態です。更に肋骨２本骨折に右脚の足首が剥離骨折しています。その他外傷は有りますが、これらは命に関わることはありませんので心配することはありません」
「これから熱を下げる薬剤を使用し、以後経過観察となります」
「た、助かるんだよな？」
「此ればかりは分かりません…私達は全力を尽くしました。後は藤宮さん次第になります」
「そう…か…」
「藤宮さんの病室は５０３号室です。では、私はこれで」
「ｋ」

一人佇むクリスに響は声を掛けようとするが
「今はやめておきましょう、立花さん。クリスさんにも色々考える事があるでしょうし僕達は本部に戻りますよ」
「え？でも…」
「良いんです、今はそっとしておいてあげましょう」
「ああ、緒川さんの言うとおりだぞ立花。兎に角本部に戻って叔父…司令にこの事を伝えよう」
「そう…ですね」
◇◇◇
５０３号室内
ピッ…ピッ…ピッ…
薬が効いたのか穏やかな表情を浮かべ眠る翔一とそれを見続けるクリス
一体どれ程の時間が過ぎたであろうか。ふとクリスの頭の中にあの光景が蘇る。
「ヒックッ…グス…嫌だよ…翔一ぃ…アタシを独りにしないって言ってたじゃねーか…」
「なぁ？何であの時アタシを庇ったんだよ…シンフォギアを纏っていたあの時ならアタシは平気だったのに…」

幾らシンフォギアを纏っていようがビルの崩壊に巻き込まれれば無事じゃ済まないが今のクリスに言っても意味は無いだろう。それ程までに冷静さを欠いてるのである。

と、その時クリスの携帯に連絡が入る。風鳴弦十郎からだ。またノイズかと顔を顰め出るが

「クリス君か？藤宮君の事は緒川から聞いた」

「グスッ…それで…？何を言いたいんだよ」

「ああ、俺が言いたい事は1つだけだ。クリス君、君は悪くない。藤宮君が怪我したのも全ては間が悪かっただけだ。余り自分を責めると藤宮君が怒るぞ」

「間が悪かったって…確かにそうかも知れないけど、自分を責めずに居られるかよッ！」

「落ち着けッ！」

「っ……」

「はぁ…兎に角自分を責める事ばかりはするな。そんな事をし続ければ、やがてクリス君も参ってしまうぞ？」

「……分かった」

「良し、それなら藤宮君を見守って居てあげてくれ。此方の事は気にしなくて良い。何かあれば響君と翼で対処する」

「……ありがと」

「なぁに、気にするな。これも大人の務めだからな。藤宮君の身に何かあれば直ぐに連絡をしてくれ、此方でも対処できる事があれば直ぐに用意させる」

そう言い弦十郎は通話を切る

「翔一……アタシが側に居るからな。だから早く元気になれよ」

◇◇◇

S．O．N．G．本部

「藤宮君大丈夫かしら…」

「大丈夫ですよ友里さん。翔一はああ見えて緒川さんの下くらいには強いはずですし、1、2ヶ月すればひょいひょいっと戻ってきますよ」

「藤尭君…もう少し心配してあげたらどうなの?」

「そんな事言われましても…俺には藤宮が簡単に死ぬ奴じゃないってのは分かってるんで心配なんかしてませんよ」

「全くもう…」

「ああ、その通りだな藤尭君」

「司令?」

「今俺達のやる事は、藤宮の帰りを信じていつも通りの仕事をこなす事だ。あいつが抜けた穴は俺達が塞いでやらないとな」

「ですね。よし、気合い入れるか～！」
「ホント、男って分からないわ…」
◇◇◇
次の日
リディアン音楽院
「クーリスちゃんっ！お昼ご飯一緒に食べよ！」
響がそうクリスに問いかけるが当の本人はと言うと
「ボーッ」
「おーい？クリスちゃーん」
「……ん？なんだよ」
「だから、お昼ご飯一緒に食べよって」
「あぁ、そんな事か。イイよ、アタシは」
「えっ、何でよ～」
「腹へってねーんだよ、だから先輩でも誘えよ」
「そっか…それじゃまた後でね！」
一瞬悲しそうな顔をするが、直ぐにいつもの笑顔に切り替え翼を誘いに行く響の後ろ姿をクリスは見つめ

「ごめん」
一言発してまた空を見つめ始める
◇◇◇
リディアン音楽院中庭
昼食をとりながら響と翼はクリスの状態について話し合っていた
「翼さん、このままだとクリスちゃん身体壊しちゃいますよ…」
「ふむ…確かに、あれは側から見ても相当参ってるのが分かるからな」
「どうすればクリスちゃん元気になるのかな…」
「私達ではどうにもならないだろう。出来る事が有るとすれば、何処かに連れ出してストレスを吐き出させてやる事だけだろう」
「それじゃ、今日クリスちゃんを連れてどっかに行きましょう!」
「そうだな。司令には私から連絡しておこう」
「よーし!少しでもクリスちゃんを楽にさせてあげる為に頑張るぞー!」
響、翼に後から聞いた未来の三人によるクリス息抜き大作戦が始まろうとしていた…

episode 4

あの事件が起きてから1ヶ月が経つ頃クリスは響達に半ば強引に街に連れ出されていた。

「お、おい！アタシは行かないって言ってるだろ…」

「いいからいいから！兎に角行くよ！」

「偶には肩の力を抜かないと駄目だぞ？雪音」

「先輩まで…たく、なんでこんな事に」

「皆心配なんだよクリス。あんなに根を詰めちゃってるといつか倒れちゃうーって」

「アタシは平気だっての」

「今にも倒れちゃいそうな感じなのに平気じゃないよ」

「…そうかよ」

「うん、だから今日はいっぱい遊んで楽しも！」

◇◇◇

「あー！もうちょっとだったのに～！」

何時ぞやのぬいぐるみを取ろうと奮闘する響だが一向に取れずにいると
「ったく、なーにやってんだよ。アタシが取ってやるよ」
「えー？クリスちゃん出来るの!?」
「はぁ？それどう言う意味だよ？」
「え!?いやいや、クリスちゃんってこういうのはやらないと思ってたから！」
「響…幾ら何でもそれは無いと思うよ？」
「え、えへへ…ごめんなさい」
「はぁ～…まぁいい見とけよ」
「ほいっと」
そんな軽い掛け声と共に目当ての物を取るクリス。
「え、えぇ～!?凄い！」
「こんなの簡単だよ。ほらよ」
「いいの？」
「良いも何も、お前の為に取ったようなもんだしな」
「ありがと～！クリスちゃん！」
「ちょっお前、抱きつくな！」
「良いじゃ～ん」

「良くねぇ！」
「ふふ、やはり立花はいつも通りだな」
「もう、響ったら…」
「おい！見てないでコイツ剥がすの手伝ってくれよ！」
「もうちょっとだけ！良いでしょクリスちゃん！」
「だから良くねぇっての！」
「私達もそろそろ行くか」
「ふふ、そうですね」
それから響達はクリスを元気付ける為にいろんな場所に行った
デパートで買い物をしたり、服屋で服を選びあってみたり。その度に響はクリスに抱きつきクリスから怒られる事が当たり前になっていた
「全くどうしようもない奴だな」
ーーでも、それがアイツの良いところなんだよなーー
「クリスちゃん！次は何処に行く？」
「アタシは何処でも良いよ」
「そんな事言わずにさー何処が良いか言ってよ！」
「んな事言われてもな…」

「なら私が連れて行ってもらったあの場所はどうだ？」
「あ！良いですねそれ！じゃあ行きましょう！」
「え？おい！あの場所って何処だよ！って、聞こえてねぇ…」
「着いてくれば分かるよクリス、だから行こ？」
「はぁ…分かったよ」
「おーい！早くしないと置いて行っちゃうよ！」
「そんな急がなくてもちゃんとついて行くから落ち着け！」
「いやぁ、だってクリスちゃんと遊ぶの久し振りだから！」
「はいはい、そうだな」
「うん！兎に角行こ！」
「だから落ち着けっての…」

◇◇◇

「此処が…」
目の前に広がる景色にクリスは言葉が出てこない。
夕焼けに染まる街並みが一望できるこの場所は、かつて翼と響、未来の３人でデートした時に訪れた場所であった
「すごい綺麗でしょ？」

「此処は私達が前に3人で来た場所なんだ。雪音も連れて行きたいと思っていてな」
「私達が此処にクリスを連れて来たのは何でか分かる？」
「何でって…」
「クリスが、響が、翼さんが、S．O．N．G．の皆が守ってくれてるこの街並みを見て欲しかったんだよ」
「雪音は1人で何でも背負うきらいがあるからな。防人である私や立花を頼ってくれ」
「クリスちゃん。私達、友達なんだから困った事があったら何でも言ってよ！1人で抱え込まないでさ！」
「お前ら…どうして」
「だって、友達で仲間だからね！」
「ああ」
「うん！」
「そっか…少し…楽になった」
「それなら良かった！藤宮さんも順調に回復してるって師匠も言ってたし、これからも藤宮さんが帰って来る場所を一緒に守ろう！」
「うん…そうだな」
――そうだ、アタシがくよくよしてちゃダメなんだ。コイツが言う様に翔一の帰る場

所を守らないとーー
「今日は…その、ありがとな。色々気づけた」
「うん！それじゃそろそろ帰ろっか！」
「そうだね。明日も早いし、響はレポート終わってないもんね」
「うへぇ…そうだった…」
「全く、しっかりやっておかないとダメだぞ？立花」
「翼さん…確かにそうですけど～」
「はは、しっかりやっておけよ？」
「あ！クリスちゃん笑うなんて酷いよ～。そんな酷いクリスちゃんにはこうだ！」
「うわ!?何すんだよ！だから抱きつくのは止めろって!?ちょ、くすぐるな！あははは！
や、やめ！」
「うりうり～！ここか！ここが良いのか！」
「あっははは！くそっ、やめろって言ってんだろ！」
「あ痛！クリスちゃん殴るのは卑怯だよ～」
「はぁはぁ…お前がやめないからだろ！」
「ほら2人とも、そろそろ帰るぞ」
「あ、待ってくださいよ翼さーん！」

「ったく、ホント元気な奴だなアイツ」

そう言いつつもクリスの顔には、何時の間にか笑顔が浮かんでいた。

◇◇◇

時は流れ更に1ヶ月経った頃、新たな脅威が迫っていた。

錬金術師を名乗るキャロル達との戦いに追い詰められる響達

それでも希望を見出し、分かり合う為に手を伸ばし続ける響。過去を乗り越え防人、人として生きていく事を決めた翼、翔一や新しく出来た後輩を守る為決意したクリス。一度はぶつかり合ったが、手を取り合い協力した切歌、調、マリアの6人でキャロルと戦ってる中、遂に翔一は目を覚ます……

episode 5

……。

ここは…？確か、俺は子供を助ける為にノイズから逃げて…そうだ。クリスはどうなったんだ？

ていうか、なんで俺は家に居るんだ？一体何がどうなってやがるんだ。

……は？な、なんで母さんと父さんが居るんだよ？

え？そんな事はどうでもいい？いや、良くねぇだろ！

世界が崩壊しそうだって？錬金術師？自動人形（オートメコファラー）？何言ってんだよ、嘘だろ？

もう時間がない？

ちょ、ちょっと待ってくれよ！俺はまだ父さんと母さんに言いたい事がいっぱいあるんだよ！

くそっ、体が何処かに引っ張られるッ！まだ話したい事を話せていないのに！

父さん！母さん！ーーーーーーー

「ハッ!?父さん!母さん!」
夢…か…取り敢えず、錬金術師?とやらの事を弦十郎のおやっさんに伝え……は?
おいおい…何だよ…アレ?
何で空が割れてんだ?それにビルの上に鎮座してるあの要塞?は何だよ!?
兎に角、今は現状確認を急ごう。
そう俺は思いつつ緊急用の弦十郎直通の番号に電話する。
「おやっさん!」
「藤宮君!?もう大丈夫なのか!?」
「俺の事は後でいいです、一体何が起きてるんですか!?空が割れてると思ったら、ビルに要塞みたいなのも鎮座してるし!もしかして錬金術師って奴がやったんですか!?」
「なっ…何故それを君が知って居るんだ!?」
「あ、ああ。少し夢?みたいなのを見て知ったんです。兎に角、その錬金術師って奴がやったんですよね?」
「ああ。そうだが、話せば長くなる。」
「そうですか…俺はどうすれば?」
「ふむ…緒川を其方に向かわせる、到着するまでそこで待機していてくれ」
「了解です。それでは」

「ああ。」

ふぅ…状況はある程度把握出来た。緒川さんが来るまでに出れる準備をしておこう。

幸いな事に体の傷は左腕の傷以外塞がっているし骨折も治ってる。

これならある程度無茶をしても平気そうだな。

それにしても、未だに鳴り止まない爆発音はやっぱりクリス達が戦っているからなんだよな…くそッ！俺にも何か出来る事があれば…！いや、よそう。命を懸けてこの世界を守ろうとしてくれているんだ、自分の無力さを嘆く前に信じて待つ事が先決だ。

この病院にもいつ飛び火が来るか分からない、スムーズに事を運ぶ為にも入り口で待っていよう。

よし、そうと決まれば行動あるのみだな。

◇◇◇

「緒川さん！」

「藤宮君！乗ってください！」

「分かりました！」

「無事目を覚ましてくれた様ですね。体の方は大丈夫ですか？」

「えぇ、お陰様で左腕以外は治りました。あの、緒川さん」

「何ですか？」

「俺どれくらい眠っていたか分かります？」
「約３ヶ月程ですね」
「マジか…そりゃ力が思うように入らない訳だ」
「鍛え直し、ですね」
「そうですね…その前にクリス達の帰りを信じて待つという何よりも大事な任務がありますけどね」
「ふふ、そうですね。その為にも早く本部に戻らないといけないので、少し飛ばします…よ！」
「いつでも準備ＯＫです！」
そうだ、これからの未来の為にも負ける訳にはいかないんだ。
頼んだぞ…クリスッ！
◇◇◇
「おやっさん！いや、司令！藤宮翔一、只今戻りました！」
「ああ、良く戻ってきてくれた。緒川もご苦労だったな」
「いえ、これくらいの事ならいつでも言ってください」
「藤尭さん、友里さん、俺が居ない間クリス達のサポートありがとうございました！」
「良いのよ藤宮君。それより体の方は大丈夫なの？」

「ええ！お陰様ですっかり元気になりました！」
「無理しないで、左腕…まだ治ってないんでしょう？」
「あー…やっぱバレちゃいます？」
「何年お前を見てきたと思ってるんだよ。素人の俺らでもそれくらい分かるさ」
「流石っすね…でも左腕以外はもう治りましたんで大丈夫です！」
「そう言うならしっかり響ちゃん達のサポートをしてくれよ？」
「任せてください！」
さて…と。しっかりクリス達をサポートしてやらないとな
その為にも先ずは、俺が眠っている間にＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．所属になっていた暁切歌、月読調、マリア・カデンツァヴナ・イヴ３人の情報を頭に入れなければ。
それと同時に、敵の情報にも目を通さなければ。
良し、覚えた。
何で一般人が居るのかとか、子供が居たりとか他にも気になる事は一杯あるが。今はそんな事を言ってる場合じゃない。
はぁ…落ち着け、いつもやっていた通りに。冷静に判断して、的確に且つ迅速に状況を伝えられる様に全神経を集中させろ。
「響、翼、クリス。聞こえるか？」

「え…この声、藤宮さん!?」
「ああ、落ち着いて聞いてくれ。今チフォージュ・シャトー内にて超高出力エネルギーが検知された」
「それならマリアさん達が対処しに行ってくれました！」
「そうか、分かった。マリアさん達が阻止するまで3人で耐えてくれ。此方からも常にサポートする。」
「はい！分かりました！」
「頼む。翼！響の動きに合わせてやってくれ」
「無茶を言うッ！」
「お前なら出来るだろ？任せたぞ！」
「任された！」
「…クリス」
「翔一！大丈夫なのか!?」
「ああ。兎に角、今はそんな事を言っている場合じゃない。クリスは唯一の遠距離型シンフォギア奏者だ。この意味が分かるな？」
「ああッ！2人を援護しつつ隙をついてぶっ放せば良いんだろ？」
「その通りだ、信じてるぞ」

「アタシに任せときな！」
「任せた！」
　良し、取り敢えず必要な事は伝えた。後はマリアさん達３人が超高出力エネルギーの原因を排除してくれれば。
　現状を知る為にも一度連絡を取ってみるか。
「マリアさん、暁さん、月読さん。聞こえて言いますか？」
「だれデスか!?」
「すみませんが、今は自己紹介している場合ではありません！そちらの状況を教えていただけますか!?」
「今ウェル博士が世界を復元させる為にプログラムを書き換えているところよ」
「分かりました。それが終わり次第直ちに響達の元に向かって下さい。」
「うん。分かった」
「御武運を」
　そう言い俺は通信を切断する。
　ふぅ…いつになっても慣れやしないな、このオペレーター業務は。
　俺がやれる事は全部終わった、後は奏者の６人を信じて見守るだけだ。
「藤宮君、疲れたなら休むと良い。君はまだ病み上がりでもあるからな」

「司令…いえ、俺には見届ける義務があります。心配は無用ですよ」
「むぅ…だが君もまだ子供だ。見届けるのは構わない、だがオペレーターの仕事は藤堯と友里の2人に任せて休んでくれ。」
「でも…」
「司令がああ言ってるんだ、後は俺たちに任せてくれ」
「ええ、私達がやっておくから休んでなさい」
「すみません、それじゃお願いします」
「「任された！」」
全く…皆良い人ばかりだ。
大丈夫と言ってもほんの僅かな違いを見つけていつも心配してくれる。
少し、疲れたな…
そうだ、この戦いが終わったらクリスと何処かに出掛けよう。
待つ事しか出来ないのが歯痒いが、仕方あるまい。そう思いつつ俺は静かにモニターを見つめ続けるーーー

episode 6

あの後、錬金術師(キャロル)達との闘いは呆気なく終わった。
マリアさん達3人が命を賭けてチフォージュ・シャトーによる世界分解、万象黙次録を阻止してくれたお陰で崩壊の危機は去った。
そして、奏者6人で力を束ねてキャロルを撃破。この事件、魔法少女事変は終息した。
この事件が終わった後、奏者6人は無事に回収され、本部にて応急処置を施されたエルフナインという少女は病院に搬送される。
その間俺は緒川さん率いるキャロル捜索隊の一員としてキャロルの捜索に当たる。
結果は2日経っても見つける事は叶わなかったが。
本部に戻って司令に報告してる時、翼から連絡が入りキャロルがエルフナインを助ける為に自分の体を使った事が判明。これにより捜索隊は解体、俺は通常業務に戻る事になる。
これが魔法少女事変の大まかな流れである。
……さて、現実逃避するのはこれくらいにして、この状況を先ず解決する事にしよう。

◇◇◇

「……なぁ？」
「なんだ？」
「何時まで抱きついてるつもりなんだ？」
「いつまでも」
「はぁ…今仕事中だから帰ってからにしよう、な？」
「嫌だ」
「ダメだこりゃ…」
そう言いつつも、俺は無理矢理剥がすことなんて出来なかった。
抱きしめる腕が、体が震えていたんだ。きっと凄く不安だったんだろう。
まぁ…抱きつかれるのは良いんだが…まさかクリスがここまで人目を憚らずに抱きついてくるとは思ってもみなかったな。
「心配だったんだぞ…」
「うん」
「またアタシから大切な人が居なくなると思った」
「うん」
「でも、翔一は帰って来てくれた」

「ああ、ただいま。それと、看病してくれてありがとうな」
「うん！おかえり！」
「それじゃ、今仕事中だから離れてくれるか？」
「それはダメだ!!今日は絶対に離さないからな！」
「マジっすか…」
「マジだ！」
あー…こうなると意地でも動かないからなぁクリス。
……仕方ないか。このまま仕事をさっさと終わらせて帰る事にしよう。
あ、帰ったら今度2人で出掛けようって話すか。
温泉とか良いかもなぁ…よし、気合い入れて頑張るぞ！
◇◇◇
やっぱり翔一の背中はあったかい。
アタシだけの場所。
仕事中なのにも関わらず、アタシのわがままに付き合ってくれる。
このアタシを心配させたんだ、このくらい別に良いだろう。そう思いながら翔一の方に顔を乗せて翔一の顔を見る。
仕事に熱心に取り組んでいる顔を見ていると、何だか胸の奥からあたたかい気持ちが

溢れてくる。やっぱりアタシは翔一が大好きなんだ。
「んん、クリス？そんなに見つめられると恥ずかしいんだけど…」
「あっ、ご、ごめん！」
「どうした？何かあるなら言ってくれ」
「い、いや、何でもない！それより喉渇いたろ？」
「え？まぁ少しだけ」
「そうか！今アタシが持って来てやるよ！」
「あっ、おい！……急にどうしたんだ？」
見惚れてたなんて絶対に言えねぇ…
しかも、振り向いたら顔がくっつく程近くて恥ずかしかった…
兎に角飲み物取りに行って落ち着かなきゃ心配されちまう。さっさと取りに行こう！

◇◇◇

あの後、結局抱きつかれたまま仕事を終わらせた。
今は帰宅する準備をしているところだ。
「これと、これ。後はアレも持って帰ってと」
よし、持ち帰るものは用意できた。後は着替えて帰るだけだ。

ズボンを履いて上を脱ぎ始めた時、痺れを切らしたのかクリスが入ってきた。
「なぁ、まだ…か？」
「うん？あぁ、クリスか。もう用意出来るから待っててくれ」
「クリス？」
「き、着替えてるなら早く言えよ！」
あ、出てった。
今更恥ずかしがる事ないのに、変な所で恥ずかしがり屋だなクリスは。
「悪い、待たせた」
「別に良いよ」
「それじゃ、帰ろっか」
「うん」
「ほら、手」
「…ん」
クリスと手を握りあう。なんて事ない日常の幸せを感じながら家に帰る。
この幸せを大事にしていこうと改めて思った1日だった。
◇◇◇
家に帰って来た俺達は先ず夕飯の支度からすることにした。

「クリスは何が食べたい？」
「アタシは翔一が作ってくれる物なら何でも良いよ」
「うーん…そう言われると困るなぁ」
「じゃあ…付き合った時初めて食べさせてくれたオムライスが良い」
「よし来た、それじゃチャチャっと作っちゃうからクリスはリビングでテレビでも見ててくれ」
「何か手伝える事無いのか？」
「ん？すぐに出来るし特に無いよ」
「そっか…分かった」
「その気持ちだけでもありがたいよ」
「そ、そうかよ」
「うん。だからクリスは待っててくれ」
　そんな会話をしながらも俺は夕飯の支度をしていく。
　３０分も掛からずに２人分のオムライス、それに簡単な野菜スープを作り終え、皿に盛りつけリビングに持っていく。
「出来たぞー」
「はーい」

「それじゃ食べようか」
「「いただきます！」」
「おいしい…」
「そりゃ良かった。作った甲斐があるよ」
「やっぱり翔一の飯は最高だ」
「そこまで言うか？」
「言うさ」
「ははっ、ありがとうな」
　あぁ、ぐちゃぐちゃだよクリス。もう少し落ち着いて食べなって、全く…
「ほら、クリス」
「んむっ…ありがと」
「どういたしまして。飯は逃げないからゆっくり食べな」
「でもおいしいから」
「そう言ってくれるのは嬉しいけど、綺麗に食べような？。よし、これからは少しづつ綺麗に食べられるようにして行こうか」
「わーったよ」
「って言ってるそばから散らかしてるじゃ無いか…」

「今日は良いんだよ」
「まぁいいか…あ、そうだ」
「なんだ？」
「キャロル達との闘いからもう少しで２週間経つだろ？」
「あぁ、そうだな」
「そろそろ落ち着いてきた頃だし、２人で旅行にでも行かないか？」
「……は？」
「あ、嫌だったか？てか学校もあるんだったな」
「いやいや！嫌な訳無いだろ！」
「え？いやだって」
「ちょっと驚いただけだっつーの」
「そ、そうか。良かった…でも学校あるんだったよな？」
「いや、学校は今夏休み中だ」
「マジ？」
「マジ」
「よっしゃ！じゃあ司令には俺から言ってみる！」
　よし、そうと決まれば早速おやっさんに電話だ！

S．O．N．G．の専用端末では無く、おやっさん個人の番号に電話を掛ける。
数コールすると、おやっさんは電話に出てくれた。
「どうした？俺の電話に掛けてくるなんて珍しいじゃないか」
「おやっさん、夜遅くにすんません。」
「あぁ、気にするな。それで？」
「来週の金土日の3日間の間、クリスと俺の休みを取らせて頂きたいんです。」
「ふむ。それは何故だ」
「クリスとの思い出作りの為に」
「ふっ…良いだろう。S．O．N．G．の人員及び響君達には俺から言っておこう」
「ありがとうございます！」
「存分に楽しんでこい！」
「ありがとうおやっさん！それじゃ！」
通話を切って直ぐにリビングに戻る。
「おいおい、そんな急いでどうした？」
「休み。取れたぞ！」
「ホントか!?」
「あぁ！おやっさんに感謝しなきゃな」

「それで、いつ行くんだ？」
「来週の金土日の３日間だ」
「随分急なんだな…」
「まぁな。それで、クリスは何処か行きたい所はあるか？」
「ん？うーん。そう言われてもな」
「じゃあ、温泉にでも行かないか？」
「温泉？」
「確か行ったことないだろ？だからこれを機に体験してみようって思ってな」
「うん…そうだな」
「よし！それじゃ何処に行くかとか決めて予約とったりしないとな！」
　その日は夜中まで旅行の事について話し合った。話し合っている間、俺とクリスは終始笑顔で話していた。